

役員視察研修の報告

■視察研修の目的

労福協活動の柱の一つともいえる地域社会への貢献。当地区も自然保護活動をはじめとし、様々な取り組みを行ってきた。ボランティア活動の1つとして定着してきたフードドライブ。食料をきっかけに生活困窮者を支援し続けている「フードバンクふじのくに」そして、県内ボランティア活動を長年にわたり先導している「静岡県ボランティア協会」を視察することで知見を広げ、労福協活動の促進や発展、行政への意見反映等に役立てていく。

■視察日程と参加者

◇2025年9月18日（木）

◇富士宮地区労福協役員5名

■視察行程

静岡市歴史博物館

静岡県ボランティア協会

フードバンクふじのくに

■参加役員から研修を終えての感想

富士宮地区労福協役職	所属団体・役職	氏名
会 長	ニッピ労働組合・中央執行委員長	飯室 憲一
今回の労福協視察研修は、地域の活動を改めて学ぶため、静岡県ボランティア協会とフードバンクふじのくにへ視察研修に参加してきました。 ・静岡県ボランティア協会では44年間ボランティア協会に携わってこられた鳥羽様より貴重なお話を頂戴いたしました。その中で、気候変動や地震により国内のボランティア活動は多くの方に参加や活動への理解は得られているが、NPOの職員として働く人たちの人材不足が深刻な問題であると話されていました。能登の震災や豪雨災害のボランティア活動が記憶に新しいが、最近では牧之原で突風災害が発生し、現在ボランティアの手が足りない状況であります。 ボランティアは自発的な意思で行動する事であり、誰かが強要したりするものではありません。体を使って被災地に行くことも素晴らしいことですが、募金や寄付、様々な形で市民一人一人が参加できることを、多くの市民に繋げる活動の重要性を労福協として第一に考えていきたい。 ・続いて、二つ目の研修としてフードバンクふじのくにに訪問させていただきました。私は11年前のフードバンクふじのくにの発足会に参加しましたが、この10年余りでこれほど県民にフードバンクやフードドライブという言葉や、各地で回収ボックスの設置が当たり前になったことに、活動に携わってきた方たちの協力があってこそだと思いました。労福協や行政、NPOなどの活動によって支援の輪が広がった反面、依然フードロスが減少しない現実は今後の運動や食品製造企業の努力や市民一人一人の意識の向上が重要と思われます。 今回は善意によって寄贈された食品の仕分け作業を少しでも体験させていただきました。賞味期限・種類・内容物の記載など最新の注意をしながら、すべて手作業で仕分けする大変さをほんの少しだけでも体験でき、今後の富士宮労福協の活動のヒントをいただきました。生活困窮者は自分自身の周りにはいないと思われている人は多いでしょう。私自身もその一人でしたが、病気や様々な状況で働けない方や支援を求めている方がいる現実を、もっと多くの人たちに知らせる活動や仕分け作業の体験を労福協の一つの柱として考えていきたい。		

ボランティアやフードバンクについて他人事だと、身近に考えられない方は多いでしょう。我々役員だけの視察研修でしたが、地域の多くの方に知らせる活動、現地へ行くだけでなく、募金や寄付・寄贈、様々な形での参加を皆さんに呼び掛けることがこれからの課題として、運動を進めていきます。

副会長

富士宮市職員組合・執行委員長

佐野 龍貴

今回の視察研修では、静岡県ボランティア協会とフードバンクふじのくにの取組について説明を受けました。どちらの団体も静岡県総合社会福祉会館シズウェル内に拠点があり、コンパクトな視察ではありましたが、静岡県内における福祉活動について改めて考える機会となりました。

○静岡県ボランティア協会

被災地へのボランティア活動として、2024年に発生した能登半島地震の被災地への支援を、震災後から継続的に行っている取組が印象的でした。静岡県においても、南海トラフ巨大地震の発生が危惧される中で、家屋の被災により避難生活が長期化することなどの懸念があります。被災者への支援において、公助で行き届かない部分は、ボランティアによる共助が重要です。人と人とのつながりが希薄になる中で、困っている人に継続的な支援を行う仕組みが大切だと、改めて感じました。

○フードバンクふじのくに

印字ミスや外箱の破損等で流通できない食料や、家庭内で消費しきれなかった廃棄食材など、毎年大量の食品廃棄物が出ています。その一方で、明日の食事にも事欠く方も増えています。この2つを結びつけるため、フードバンクふじのくにを立ち上げ、これまでの取組の拡大に向けた活動について何うことができました。

また、視察では、実際の仕分け作業の一部を体験させていただきました。日本語表記の無い物、アルコール類、期限切れの物などが無いか、一つ一つ手に取り確認する作業はとても大変で、良い経験となりました。

副会長

静岡県教職員組合富士支部・支部長

野田

富士宮地区労福協の活動の一環として、静岡市にある「静岡市歴史博物館」「ボランティア協会」および「フードバンクふじのくに」を視察させていただきました。地元の歴史や地域福祉の現場に直接触れる貴重な機会となり、今後の活動や教育現場での取り組みに大いに参考となる内容でした。特に印象に残ったのはボランティア協会とフードバンクふじのくにの訪問です。

○静岡県ボランティア協会

まずボランティア協会では、地域に根ざしたボランティア活動の実態や、災害時の支援体制、若者の参加促進に向けた取り組みなどについて、丁寧にご説明をいただきました。特に先日発生した台風15号による竜巻被害の実情についてのお話は、私の心に強く残りました。突風による住宅の損壊や停電、倒木などが相次いだこと、飛び散ったガラス片が畑の中などに多く残されていることなど、報道だけではわからないことがたくさんありました。このような災害対応の現場では、日頃からの備えと地域のつながりが何よりも重要であることを改めて実感しました。協会の方々は、「顔の見える関係づくり」が災害時の迅速な対応につながると強調されており、平時からの信頼関係の構築が、非常時における支援の質とスピードを左右することを学びました。

○フードバンクふじのくに

次にお話しいただいた「フードバンクふじのくに」では、食品ロスの削減と生活困窮者支援を両立させる取り組みについて学びました。企業や個人から寄付された食品を、必要とする家庭や福祉施設へ届ける活動は、単なる物資の提供にとどまらず、「食を通じたつながりづくり」としての側面も持っています。私たちも実際に食品の仕分け作業を体験させていただき、支援物資がどのように集まり、

どのように分類・管理され、届けられるのかを肌で感じることができました。

このような活動は、地域の課題に対して市民一人ひとりができることを考え、行動に移すきっかけとなるものであり、非常に意義深いと感じました。

私は教職員として、今回の視察で得た知見を、今後のボランティア学習に活かしていきたいと考えています。生徒たちが地域社会の課題に目を向け、自ら行動する力を育むためには、こうした実践的な学びが不可欠です。特に災害時の支援活動については、命や暮らしに直結する重要なテーマであり、教育現場でも積極的に取り上げていくべきだと感じました。ボランティア活動を通じて、他者への思いやりや協働の大切さを学ぶことは、生徒たちの人間的成長にもつながると確信しています。

最後に、今回の視察を通じて、地域福祉の現場で活動されている皆様の熱意と工夫に触れ、大変刺激を受けました。今後もこうした機会を広げ、より多くの方々と共に学び、支え合う地域づくりに貢献していきたいと強く感じました。また、教育現場においても、地域との連携を深めながら、実践的なボランティア学習を推進していく所存です。

事務局長

日本プラスト労働組合・執行委員長

浦本 幸男

今回の役員視察研修にて訪問しました「静岡県ボランティア協会」「フードバンクふじのくに」について報告します。

○静岡県ボランティア協会について

本協会は、「誰もが安心して暮らせる社会」を目指し、市民のボランティア活動や市民活動を推進する中間支援機関であり、事業としては、ボランティア活動を実践するための場の提供と人の育成、ネットワークの構築に焦点を当てていました。体験・学びの場の提供として、「サマーショートボランティア活動計画」や「静岡県ボランティア研究集会」などを通じて、特に若者や一般市民に活動の機会とスキルアップの場を提供しています。災害支援体制の構築としては、1995年の阪神・淡路大震災以降、「災害」を重要テーマとし、平時から災害ボランティアコーディネーターの養成や図上訓練を行い、災害時の迅速な支援ネットワークを構築・維持しています。全国の被災地への支援活動も積極的に行っています。機関誌やウェブサイトを通じて情報発信し、ボランティア活動に関する個人の相談や団体運営の支援を行っています。当協会は、地域社会の課題解決と相互扶助の精神を具体化する上で、不可欠な役割を担っており、我々が目指すべき社会貢献の方向性を具体的に示していますので地域社会の一員として、積極的な役割を果たすことの重要性を強く感じました。

・フードバンクふじのくにについて

フードバンクふじのくには、「もったいない」を「ありがとう」に変えることを目指し、安全に食べられるにもかかわらず、様々な理由で処分されてしまう食料を企業や個人から寄付を受け、生活に困窮している人たちに無償で提供する活動を行っています。設立検討は、静岡県労働者福祉協議会が中心となり進められ、食品ロス削減と生活困窮者支援という、現代社会の二つの大きな課題に同時に取り組む、極めて社会的意義の高い活動を展開していました。活動理念は、「困った時はお互い様」の相互扶助社会の実現です。主に食品の「回収・管理・提供」の3つの段階で活動を展開していて、提供に関しては、直接個人に行うのではなく、行政の生活困窮者自立支援窓口や社会福祉協議会、子ども食堂、ひとり親支援団体など、既存の支援ネットワークを通じて、本当に支援を必要とする世帯に届けられています。労福協としては、フードバンク活動への寄付の呼びかけや、食料提供の場としての協力、そして生活困窮に関する相談窓口との連携を強化し、組織的な支援体制を構築することで、活動の安定性と効果を高めることができると感じました。

視察レポート① 静岡県ボランティア協会

富士宮地区労福協では、地域社会を少しでも良くするため、労働者自主福祉運動における支えあい、助け合う思いを様々な形で取組んでいます。県内はじめ広域にわたるボランティア活動、市民活動を支え続けている実践的な取り組みを学ぶため、静岡県ボランティア協会を視察しました。活動において、どのような苦勞があり、また工夫がなされているのかを知ること、今後の実践的な取り組みへつなげることを目指して研修に参加しました。

静岡県ボランティア協会は、ボランティア活動・市民活動を推進するため、ボランティアの人たちの手により、1977年4月10日に設立。個人、グループ、学校、行政、企業、労働組合など様々な人たちとつながり、個々の力をさらに大きな力へ変えていく可能性を信じて、民間の“中間支援組織”として、活動に取り組んでいます。

ボランティアとは「自発的に、自らの意思（意志）で行動する人」という意味です。一人ひとりの人間の尊厳や、自由な意思を大事にする理念が込められています。



どんなボランティア活動にも社会を良くするチカラがあります。一人ひとりの力は小さくても、ボランティアが協力し合うことで、大きな推進力が生まれます。

ボランティア活動の意義は地域社会をよりよくすることにあり、その活動（経験）は自分のためにもなっています。まさに“情けは人のためならず”。

ボランティアは「特別な人の活動」ではない、一人ひとりの「ささいな気づきがボランティアの種となる」。ボランティアのきっかけはすべて「こうしたい」「こうだったらいいのに」から始まります。“あなた”にしか気づけないことがあるかもしてません、、とても印象的な気づきでした。是非、ボランティアのアンテナを高くしていきましょう。

ボランティア活動に関心をもつことができれば、さっそく活動に参加してみましょう。

趣味や特技、好きなこと、関心のあることからボランティア活動に参加することがお勧めとのことです。ただし、善意の押し付けにならないように気をつける必要があります。

ボランティア活動は「自発性・公益性・無償性・創造性」の4原則を守ってこそ成り立ちます。ボランティアは職員ではありません、自由意思に基づく活動であり、金銭的な報酬はいただきません。そして、活動には真剣に取り組めます。

ボランティアには責任があります。その責任とは、活動における安全管理はもとより、社会的信用や人間関係を壊さないための責任です。ボランティアとは一人ではできません、相手との信頼関係、家族の理解があってこそ続けられます。自分勝手なふるまいをすれば、ボランティアの信用はなくなってしまいます。

静岡県ボランティア協会では様々な活動を行っております。能登半島地震や本年9月台風15号に襲われた牧之原市被災地などの復興支援などは想像に難くないと思います。私たちにできることのひとつとして、このような被災地で活動する「災害ボランティア」の支える活動があります。災害時のボランティア活動には資金が必要、そんなボランティア活動支援金を集める活動も非常に大切です。

労福協活動において、もっとできることがあるのではないかと考えさせられる時間でした。募金活動をはじめ、一つひとつの活動をしっかりと取り組まなければなりません。

鳥羽事務局長の温かいご対応と、実践に基づいたお話から、多くの学びと気づきをいただきました。今後、当地域においても「誰もが関われる仕組みづくり」「つながりを育む場づくり」など、何ができるか考えて活動に反映させていきたいと思いました。



視察レポート② フードバンクふじのくに

続いて、NPO 法人フードバンクふじのくにを訪問し講習を受けました。講師を務めていただいたのは望月健次事務局長です。フードバンクふじのくにの仕組み、そして「食品ロスの現状と課題」について学ぶことができました。

フードバンクふじのくには2014年5月に活動開始、2017年3月に認定NPO法人化しました。公共性の高い組織を目指し、様々な団体から成り立っており、皆で活動をしています。

フードドライブ活動を通じて、食料品を寄贈されたことがある方も多いのではないのでしょうか。しかし、寄贈した食品のその後については知る機会も少ないです。

フードバンクとは、まだ安全に食べられるのにやむなく処分される食品の寄贈を受け、必要としている人に届ける活動です。食品ロスと生活困窮の二つの社会的課題を結び付け、解決を目指しています。

食品ロスとは、本来は食べられる状態であるにもかかわらず、食品が廃棄されること。日本で発生している食品ロスの量は年間472万トンとのことです（令和4年度）。一人当たりに換算しますと、年間38kgの食品ロスとなり、年間一人当たりのお米の消費量に近い数値となります。

食品ロスの問題は、単に食料がもったいないということではありません。食品サプライチェーンの各場面において、多大なコストを消費して作られた食品が、結局人が食べることなく、多大なコストを消費して廃棄されてしまうということが問題です。食品ロスに対し、国も様々な施策や法整備を行っていますが、食品ロスの削減に向けては、国や地方公共団体をはじめ、学校、事業者、消費者など、各々の主体がそれぞれの立場で食品ロスの問題を他人事ではなく我が事と捉え行動に移すことが重要であると学びました。

食品ロスに対して私たち消費者ができることを考えてみましょう。①家庭の食材チェック ②冷蔵庫内の在庫管理 ③賞味期限と消費期限の理解 そして④フードバンクへの寄贈。また、外食時は食べられる量を注文することも大切です。

多くの食品ロスが出されている一方で、生活に困窮し、明日の食事にも困る方が増加しているという現状も社会問題として考えなければなりません。生活保護費保護世帯数の増加、非正規雇用率の悪化、子どもの7人に1人は困窮状態という現状、新型コロナウイルスや物価高の影響もあるでしょう。「生活困窮問題」はすでに遠い国の話ではないということです。

フードバンクふじのくにの事業の仕組みについて、お話を伺いました。

私たちが取り組むフードドライブなどにより集められた食品はフードバンク倉庫にて、一時保管されます。原則として、食料希望者から直接食料支援の依頼を受けるわけではなく、「相談窓口」を介して依頼を受け付けています。

生活に困り、食料を希望する人に対して食料を渡して終わるのでは、根本的な解決にはなりません。そのため、相談のプロである生活困窮者自立支援制度の自立相談支援事業（相談窓口）や、各種支援団体と連携して支援を行う必要があります。生活困窮者自立相談制度

生活困窮者自立支援制度とは、生活に困っている人が自立できるよう、相談・就労・住居・家計など多方面から支援する国の制度です。生活保護の前段階として位置づけられています。この制度は、「生活困窮者自立支援法」に基づいて、全国の自治体の実施しています。仕事が見つからず働けない、家賃が払えず住まいを失いそう、社会とのつながりに不安がある、家計のやりくりが難しい、子どもの学習環境に不安がある等、相談窓口と連携し、根本的な相談支援の実施中に「当面の食料がない」という声に応え一時的な繋ぎの食料支援を行っています。

相談に来る人しか支援ができないという限界が存在するしますが、フードバンク支援を最初の一步に。葛藤を経て相談に来た方が自立へのモチベーションを得られるような食料支援を行いたいという思いです。

自治体等の相談窓口の他、地域包括支援センターや学校、子ども食堂、学習支援団体など、この他にも多くの団体と連携しています。

具体的な食料支援は、依頼書を受領して始まります。家族構成に合わせて段ボール箱へ食料を詰め込み「食料セット」を作ります。お米をはじめ、在庫状況を見ながら食品を詰めていきます。なるべく使いやすい組み合わせを考え、子どもの数に応じたお菓子を箱の一番上に置くなど、箱を開けたときに喜んでもらえるような気配り心配りも心掛けているとのことでした。



研修では、実際に食品の仕分け作業を体験させてもらいました。フードバンクへの食料寄付として適切ではない食品の判別や、必要としている食品、賞味期限についての考え方などを学びました。

実際に食品を保管している状況も視察させていただきました。保管中の食品の一部ではありますが、食品セットを詰め込みやすいように仕分けされておりました。実際の食品セットを見ることもできました、家族3人分の食品が1つの段ボール箱いっぱい詰め込まれていました。これだけの量でも1家族分であることに驚き、多くの食品が必要であること、必要とされる食品をバランスよく寄贈することの大切さを改めて学びました。

まとめとして、フードバンク設立の趣意を伺いました。

フードバンクを地域の仕組みとして定着させ、食を通じて人の縁を結び、お互いが助け合う。「困ったときはお互い様」な社会づくりを目指しているとのこと。

フードバンクの設立が、私たちの暮らす社会の在り方を改めて見直すきっかけとなり、「もったいない」を「ありがとう」に変えることが当たり前の社会になることを強く望んでいますとのこと。



一人ひとりが当事者意識を持って、フードドライブ活動、フードバンクを支援する活動に参加していくことが社会的課題の解決に繋がっていきます。労福協活動においても、今一度私たちにできることを考えて、実践してまいります。



(研修報告担当 事務局次長 市川)